

一般の部課題 「吾輩は猫である」より抜粋 夏目漱石

渡部 … 吾輩は猫である。名前はまだ無い。

A … ぐい<sup>う</sup>で生<sup>ま</sup>れたか<sup>と</sup>ん<sup>と</sup>見<sup>あ</sup>当<sup>あ</sup>が<sup>つ</sup>か<sup>ぬ</sup>。

何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。

吾輩はここで始めて人間というものを見た。

しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獯<sup>う</sup>悪<sup>あ</sup>な種<sup>しゆ</sup>族<sup>ぞく</sup>であったぞうだ。

この書生というのは時々我々を捕<sup>と</sup>ま<sup>え</sup>て煮<sup>ゆ</sup>て食<sup>く</sup>う<sup>て</sup>う<sup>た</sup>う<sup>て</sup>話<sup>わ</sup>せ<sup>る</sup>。

しかしその当時は何<sup>か</sup>と<sup>い</sup>う<sup>考</sup>も<sup>な</sup>か<sup>つ</sup>た<sup>か</sup>ら<sup>別</sup>段<sup>だ</sup>恐<sup>そ</sup>い<sup>う</sup>も<sup>思</sup>わ<sup>な</sup>か<sup>つ</sup>た。

ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。

掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見<sup>み</sup>始<sup>は</sup>め<sup>め</sup>であるう。

この時妙なものだと思<sup>つ</sup>た<sup>感</sup>じ<sup>が</sup>今<sup>も</sup>残<sup>つ</sup>て<sup>い</sup>る

B … 吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにははなはだ不人望であった。

ぐい<sup>う</sup>へ行<sup>い</sup>つ<sup>て</sup>も跳<sup>と</sup>ね<sup>け</sup>け<sup>ら</sup>れ<sup>て</sup>植<sup>く</sup>手<sup>て</sup>で<sup>こ</sup>い<sup>て</sup>へ<sup>れ</sup>手<sup>が</sup>な<sup>か</sup>つ<sup>た</sup>。

いかに珍重されなかったかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。

吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に  
いる事をこつめた。

朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乗る。

彼が昼寝をするときは必ずその背中に乗る。

これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかった  
からやむを得るのである。

その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気の良い  
昼は椽側へ寝る事とした。

しかし一番心持の好いのは夜に入ってこのうちの小供の寝床へもべ  
り込んでいっしょに寝る事である。

∴ じい書くては猫といえどもやり切れない。

皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだ。と英吉利のシニア

ー・スミスとか云う人が苦しがつた。と云う話があるが、たとい骨だけ  
にならなくとも好いから、せめてこの淡灰色の斑入の毛衣だけはちよ  
っと洗い張りでもするが、もくは当分の中質にでも入れたいような  
気がする。

人間から見たら猫などは年が年中同じ顔をして、春夏秋冬一枚看板で  
押し通す、至って単純な無事な銭のかからない生涯を送っている。



D	C	B	A	配分
•	•	•	•	
•	•	•	•	
•	•	•	•	
D	C	B	A	

れるように苦しかったのが、飲むに従ってようやく楽になって、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなった。もう大丈夫と二杯目は難なくやっつけた。ついでの盆の上にごぼれたのも拭<sup>ぬ</sup>ぐがごとく腹<sup>はら</sup>内に収めた。それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺<sup>う</sup>つため、じっとおぼえていた。次第にからだは暖かになる。眼のふちがぼつとする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じゃ猫じゃが踊りたくなる。主人も迷亭<sup>めいどう</sup>も独仙<sup>どくせん</sup>も羹<sup>かみ</sup>を食<sup>く</sup>えと云う気になる。金田<sup>かねだ</sup>のごつねを引掻<sup>ひっかく</sup>ごつねりたくなる。妻君<sup>さいきみ</sup>の鼻<sup>はな</sup>を食<sup>く</sup>い欠<sup>か</sup>きたくなる。うんうんになる。最後にふらふらと立ちたくなる。起<sup>た</sup>つたりたまたまめきたくなる。じつじつは面白<sup>おもしろ</sup>いそとへ出<sup>で</sup>たくなる。おんおん御月<sup>ごげつ</sup>様<sup>さま</sup>今晚<sup>こんばん</sup>はと挨拶<sup>あいさつ</sup>したくなる。べじつも愉快<sup>げきげき</sup>だ。